



「なるほど。やはり まちがないようです。
もじから、や。が きえたり、
つけくわえられたり しています。」
「にやにや？ むずかしいにや。」
「たとえば、おすしの おおとろに
を つけると おおどろに なります。
かぎを ぬすんだ テンテン・マールは
ことばから、や。を
けしたり、くわえたり できるに
ちがいありません。
ここにも おかしな ことばが
みつつ ありますよ。」

ついに テンテン・マールが
すがたを あらわしました。
「テンテン・マール! まちの ことばを
もとに もどしなさい!」
ことばたんていが かけより、けいさつかんが
テンテン・マールを
とりかこみます。



すると、テンテン・マールは
にやりと わらって いいました。
「おまえが ことばたんていか。
おいらは どんな ことばにでも
。や。を とったり
つけたり できるぜ。
どうだ。しょうぶするか?」
「もちろん、のぞむ ところです!
テンテン・マール、わたしの ことばを
かえることが できるかな?」
ことばたんていが かまえました。



「ちょっと まった！ その かきは
たべては いけません。」
ふたたび かねだたぬきちの いえに
やってきた ことばたんていは、
おおごえて さげびました。
「そうか、わかったにや。
かぎの、が とられて
かきに なっていたんだにや。」
「テンテン・マール、を
もとに もどしてください。」

うなだれる テンテン・マールを みて、
ことばたんていは にっこり わらいました。
「ことばは こころと こころをつなぐ たからもの。
たいせつに しないと いけませんよ。」

